NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第 8 章　死せる機械の遺産

THE INHERITANCE OF DEAD MACHINES

そのトンネルは、地上に引かれた管轄境界よりも古かった。

コンクリートが打設されたのは、自治体というものが契約より長く存続すると、技術会社がまだ信じていた時代だった。三十メートルごとに同じ社章が塩の層の下から現れ、百メートルごとに別の政府が薄いラベルを貼り重ねている。表記に使われた言語のいくつかは、とうに日常から消えていた。ロイはその一部を読むことができた。なぜ読めるのかはわからなかった。

ナディラは前を歩き、換気格子の向こうへ光が漏れないほど絞った照明を使っていた。右側を黒い水が重力に従って流れ、左の壁には銅編線と、長年の熱で黄変したポリマーのケーブルが続いた。廃式のメーター群が彼らの通過に合わせて乾いた音を立てる。保守のためではない。ただ取り外すための費用を、誰も払わなかったのだ。

「みんなネットワークから消えるって簡単に言うわ」ナディラが言った。「端末の電源を切ることだと思っている。だけど、質問そのものを理解しないシステムなんて、見たことがないのよ」

ロイは七角形の印に触れた。鉱物の白い析出物の下に三つの部分からなるコードがある。周辺処理系は、意識がそれと認識するより前に、不完全な工業用名前空間を組み立てていた。その二つの出来事の間の短い沈黙を、彼は感知した。生物の神経系なら気づきようもない間隔だった。

「顔が変わったわね」とナディラ。

「この印を見たことがある」

「どこで？」

「身体検査だ。新しい層の下にあった。外科医は、供給元がプドゥにあると言った」

「製造元とは限らないわ」

彼女は歩き続けた。この区別を好んでいるようだった。彼女の世界では、所有、製造、流通、来歴は別々の職業であり、一つの物品について意見が一致することはまれだった。

トンネルの終端は国境検問所ではなかった。ポンプが三基と空の椅子が置かれた保守室だった。ポンプの向こうで、暗いレインコートを着た女が、電源の入っていない端末のそばに座り、小さなガラス製フィルターを歯ブラシで磨いていた。ナディラが近づいても立たない。認識したという表情を浮かべずにロイを見た。

「その人が乗客？」

「請求書の方よ」とナディラ。

女は旧水道局の紋章を刻んだ金属片を手渡した。名前の代わりに日付が並んでいた。発行、停止、そして金属の古さに不釣り合いなほど新しいインクで繰り返された更新。ナディラは上着の内側に留めた。

「一時間前、検査隊が通ったわ」と女。「水槽の微生物を調べると言って、部屋の熱分布を測った。細菌は電池を使わない、と教えてやったのよ」

「何て答えた？」

「細菌を捜しているんじゃない、って」

女は初めてロイの目を正面から見た。「男の特徴を言ったわ。登録なし。信頼できる世代記録もなし。医療請負業者が恩赦を出すんですって」

「何に対する恩赦だ？」とロイ。

「存在していることに」

目覚めてから、彼はその言葉のさまざまな変形を聞いてきた。今のものがいちばん明瞭だった。

＊　＊　＊

プドゥ・アルファは、層になって始まった。

路面には商人と洗濯屋、修理場、礼拝所、屋台、旧式の交換窓口がひしめく。古い屋根の上にはハイパーサイバージャヤの塔が、宙づりの交通線の下に立っていた。公衆向けの外壁には、淡水化された

水、リース臓器、認証済み身分、共同仮想退職生活における管理された平穏の広告が流れている。その下には、使用期限の過ぎたインフラが積み重なっていた。

ここは単一の意味でのアラブ都市ではない。マレー語、アラビア語、北京語、タミル語、英語、混成の交易言語が店先をまたぐたびに切り替わった。モスクの向かいには「元に戻せる改造」を約束する義体交換所があり、互いの存在を不思議がる様子はなかった。金融契約では、国家通貨より水の配給権が用いられることも多い。信仰の暦は計算資源の割当表と同じ端末に表示された。

ロイはその密度に安堵した。顔が無数にあり、どの顔も彼に、見る許可を求めてこない。望めば群衆を運動ベクトルと歩容確率へ変換できた。しかしそうしなかった。通行人の誰もがセンサーになり得る場所では、無知もまた人間のままでいる方法――あるいは人間に似せる方法――だった。

ナディラは裂けた導電布を垂らした日よけの下で止まった。向かいの壁の画面では、整然としたガラスのオフィスから女性経営者が株主に微笑みかけていた。音声はない。下のティッカーは、南方領域の持株会社が獲得した雨水再生事業の権益を伝えている。ナディラはほとんど見なかった。ロイは、カメラが女性の顔に長く留まるのに気づいた。

「スリヤへ直行はできない」とナディラ。「会社名と住所は複数ある。今日確かめるのは、そのうち今も意味を持つ場所よ」

「俺たちが来ると知っているのか？」

「金を払った相手は、何かが来ると知っている。何が来るかまでは知らない方がいい」

彼女は低い天井の部品街へ導いた。周囲を行く貨物ドローンには低すぎる空間だ。半田のフラックス、炒ったカルダモン、湿った絶縁材、印刷皮膚の薬品じみた澱粉臭が混ざる。清潔な白衣を着た十代の少年が、古いアナログ圧力変換器を重量で売っている。近くのカウンターのガラス瓶には、米粒ほどのセラミック神経コネクタが詰まっていた。

通路の末端で、ナディラは右頬を旧世代の人工皮膚で覆った店主と話した。金属片を台に置く。男は告発状を見るようにそれを眺め、機械式パンチリーダーに通した。装置は二度音を立て、細い紙片を吐き出した。店主は紙を引きちぎって読んだが、ナディラには見せなかった。

「誰がスリヤを捜している？」

「自分の過ちに金を払える人よ」

「スリヤはもう過ちを売らない」

「前は売っていた」

「だからスリヤになったのさ」

男の視線がロイへ移った。ほぼ見えない動きだったが、顎の筋肉の不随意な緊張をロイは追跡できた。人を意識せず怖がらせる才能を得たのか、それとも役に立つことを知っている者だけが、もう恐怖を知っているのか。彼にはわからなかった。

店主は耐油紙に包んだ部品を出した。家庭用ポンプのシールに似ている。ただし中央の開口部には浅い七つの辺が切削されていた。ナディラはヴェイルが複写した図面を横に置く。輪郭は一致した。

「古い継手さ」と店主。「軍用じゃない。公式には医療用でもない。産業用の連続性コネクタだ。変わっていたのは、周囲のすべてが変化しても、こいつだけが変わろうとしなかったことだ」

「誰が注文した？」とロイ。

「契約に答えは付いてこない。付いてくるのは配送コードだけだ。元の工場は閉じた。金型は東へ、次に南へ渡り、やがて慈善活動を宣伝しない財団に消えた」

「名前は」

「高いぞ」

ロイは紙を手元へ引いた。この街では性急さが高価な化学物質であることを、彼は学んでいた。ナディラは水クレジットの薄片を二枚置いた。男は別の紙片を出した。座標とシャッター番号、摩耗したラテン文字が一行。

SURIYA COMPONENTS / CONTINUITY DESK

「ここで聞いたことにするなよ」と店主。

「何か聞いたかどうか、まだ決めてないわ」とナディラ。

＊　＊　＊

岡京の登録システムには、その経路がデータの断絶として表示された。

貨物は公認された三つの管轄を横断し、その後、貨物としての特徴を失った。公開推論エンジンは密輸、移住、窃盗、センサー故障を候補に挙げ、それぞれに確信度を付けた。しかし、合法的な移動に必ず経歴情報を要求する網の中を、どうして一人の男が通過できたのかは説明できなかった。

川村は推奨された回答を無視した。注目したのは誰も要求しなかった記録部分だ。機械式パンチリーダーが紙片を出した際に発生した小さな電気的署名。自動購買装置は、古い連続性コネクタのチェックサムを保存していた。型録には七角形の開口と、すでに存在しない機械向けに記述された説明があった。

現代の官庁なら証拠と呼ばないほど弱い接点だった。彼には十分だった。

「型録を入手できますか」と補佐官。

「通常システムを通してはならない」

「なぜです？」

「通常システムは、われわれが何を質問したかから学ぶからだ」

補佐官は紙の記録用に空けられた机の一角を見た。省の計算装置は朝食までに百万件の市民取引をモデル化できる。それでも秘密に対して無関心であり続けるとは信頼されていなかった。

「現場班は一班だけ。指揮官は人間。人工隊員の事後テレメトリーは残すな。対象を回収しろ。連続性部品は破壊するな」

「目的はその部品ですか？」

「今のところ、両者は同じ目的だ」

机の鍵付き引き出しには、彼が今の役職に就くずっと前に署名した研究助成契約の写しがあった。すでに存在しない機関名で、一人の女性が資金を受領していた。筆跡は正確だった。彼女が契約の作成者よりもその内容を理解していることを、川村は当時から知っていた。省は有限の生涯を少し延長する方法に金を払った。やがて、彼女が別のものを追っているという噂が流れ始めた。

川村は魅力的だからという理由で噂を信じたりしない。人々がその検証を不可能にするために異常な努力を払うとき、初めて信じるのだった。

＊　＊　＊

連続性デスクは、自治体用ロボットの再生品を売る店の奥にあった。

企業ロゴはない。分解後に修理見積額が確定するという看板だけだった。窓際には年老いた検査機が三台ある。それぞれ脚が違い、一台には行政上の冗談のように人間サイズの義手が取り付けられてい

た。伝統的な頭巾と工業用の保護眼鏡を着けた女性が、機械の胸郭の内側でブラケットを溶接していた。彼らが入るとトーチを止めたが、面は下ろしたままだった。

「ネットワーク診断はしない。政府の適合証明も出さない。自力で歩いて店を出たら、保証はドアまで」

ナディラは紙片を差し出した。

女性は読み、ロイを見て、作業台の下の小さなスイッチを押した。天井のカメラが暗くなった。それ以外は何も変わらず、目に見える警報より不気味だった。

「印を見せて」

ロイは立ったままだった。「なぜだ」

「あなたを送った人物が、物語を部品と取り違えているかもしれないから」

彼はヴェイルがナディラの端末に転送した画像を開いた。女性の面が上がる。一度見て、もう一度見た。その表情は驚嘆ではなかった。何年も前に焼け落ちた建物から、失われた品が戻ってきたときの、慎重な悲しみだった。

「これは単なる継手じゃない。二つの部品を位置合わせするのが継手。これは二つの世代を位置合わせしていた」

「どの世代だ？」

「五つの会社を生き延び、廃止しようとするすべての試みに耐えたインターフェース規格よ。うちは外側のカラーを供給した。内側の幾何構造は別のところから来た」

「誰だ？」

「昔はみんなそれを私に聞いた。やがて誰も来なくなったわ」

彼女はマリアム・スリヤと名乗った。スリヤが姓か、屋号か、後から選んだ名前なのかは明らかにならない。プドゥでは曖昧さが法的な防具にもなる。彼女は鍵のかかった扉から、深圳でロイが目覚めた部屋より小さな工房へ案内した。天井にはベルト、リール、空気圧のマニホールド、大きな真鍮製の焦点調節輪を持つ顕微鏡が吊られていた。動作中の唯一のコンピューターは、手袋をした拳でも操作できる大きなスイッチを介して、独立電源につながっていた。

壁には「DEAD INTERFACES」と書かれた厚紙のフォルダーが掛かっていた。マリアムはそれを下ろし、印刷された在庫一覧を取り出し、グリースペンシルで番号を書いたページを開いた。

「世界の供給業者が認知型シリアル管理へ移行したとき、適応機械を介さずに管理できる部品を、どうしても残したいという顧客がいたの。予測による交換品じゃなく、物理公差が欲しかった。請求書からは顧客名が消されていた。秘密の仕事にしては部品が高すぎたし、先端技術というには古すぎた」

「その一つが俺の中にある」

「そうね」

「誰が作ったかわかるか？」

「いいえ。でも、誰が発注を許されていたかは言える」

彼女は、廃止された企業略号の印刷された認可欄を指した。

TYR-L。

ロイは見つめた。意図するより早く、音節が一つの名前になった。

「タイレル」

マリアムは、なぜ彼がその名を知るのか問わなかった。新たな、望ましくない親密さをもって彼を観察した。

「会社はもうないわ。捨てるのを恐れる人が十分にいれば、名前は会社より長く残る」

「その部品は何のために？」

「外部アクティベーションの転送。初期型では、別の認証済み原本が遷移を承認しなければ、新しい身体構成を受け付けなかった。身体の中には検証済みの稼働イメージだけが残る。重大な破損の後にコールドスタートするなら、再び原本が必要になる」

その言葉が自分の人生を並べ替えるのを、ロイは待った。

「外部キーか」

「外部の原本よ。キーは扉を開ける。でもこれは、システムが何になってよいかを指示した」

マリアムは写真を見せた。定規の横に、小さな黒いメモリーカードがある。補強樹脂の外装と、細い耐腐食接点。外観は、彼女が見習いになる前に廃れた民生技術のものだった。誰かが内部構造を交換せず維持し、雨と電気で損なわれやすい部分だけを再設計したのだ。

「ソニーのメモリースティック」とナディラ。

「PRO Duo 系統。うちの型録では MAX と呼んでいた変種よ。保護機構は MagicGate に依存していた。でも旧認証プロトコルだけが秘密じゃない。認証されたペイロードを専用治具がどう解釈するか、それが重要だった」

「カードはどこに？」とロイ。

「持っていない。治具もない」

「誰が？」

マリアムは写真をフォルダーに戻した。「仕事を発注した側が機器を保持した。原型の治具は二セット。台帳にはそうある。その後のことは相続の問題よ」

「誰の相続だ？」

彼女は正確な答えと不完全な答えのどちらが危険か考えた。

「持ち主を知りたいなら」と彼女は言った。「タイレルより長く生き残った家族を捜しなさい」

＊　＊　＊

外では再生された光起電箔の日よけに雨が降っていた。地区の午後の礼拝は終わり、子供たちが屋上貯水槽の交換膜カートリッジを運んで通路を横切った。水が豊富でありながら手に入らないこともあると教えられた者らしく、水たまりを器用によけていく。

ロイはマリアムの話を考えた。タイレルという名前は新しくなかった。しかし、タイレルが相続財産であるという発想は新しかった。

自分に望んだより短い寿命を与えた男を、彼は覚えている。巨大な執務室と、所有者の声に宿っていた制御された優しさ。彼を殺したことも。そうした事実は何の困難もなく記憶に収まった。だが、あの最初の面会がどう終わったかを知る誰かが、自分を再起動する仕組みを残したかもしれないという可能性は、容易には収まらなかった。

それでも外部原本は、彼の覚醒を一つの狭い意味で説明した。復元した者は身体だけでなく、その身体がロイとなることを許可する認証にもアクセスできたのだ。認証は検証済みキャッシュに変換され、原本は今も彼の外にある。通常の再起動には必要ない。壊滅的な障害には必要になる。

次の疑問は、不愉快なほど正確だった。キャッシュが破壊されたとき、原本から復元される人物は、深圳の雨の下に立っていた人物と必ず同一なのか。答えがあるふりをするために、エネルギーを浪費はしなかった。

「黙っているのね」とナディラ。

「一つ見つけた」

「何を？」

「連中に俺を壊させてはいけない理由だ」

ナディラは笑わなかった。「それならもう何個もあるでしょう」

「これとは違う」

通路の環境信号がわずかに変わった。意味がわかる前に、ロイはそれを登録した。配送ドローンが連動して高度を変え、無線キオスクは診断周期に入り、公衆情報の供給が突然停止した。停電にしては整然としすぎていた。

マリアムの店のシャッターが降り始めた。

「検査よ」と狭まる隙間の向こうで彼女が言った。「この地区で溶接を覚える者は、いつここにいてはいけないかも習うの」

ナディラがロイの袖に手を伸ばした。彼はすでに買い物客の中の三人を特定していた。淡青色の作業服を着た自治体修理検査員に見える。顔は、規則を守る建築物ほど印象が薄い。衣服の下で、彼らの歩容のタイミングは、人間の一団には維持できない精度で同期していた。

「ヒューマノイドだ」

「何体？」

「見えるのは三。路地の外に指揮源が一つ」

三体は修理街へ曲がった。通りの端で監視ドローンが吊りケーブルの間に降下し、市の回線で無害な衛生勧告を放送している。カメラは武器に見えなかった。シャッターに近づく機械の目も同じだった。

ロイの内部で、いつもの計算が始まった。三体が接近を終える前に距離を詰められる。化学組成もわからない希少な媒体を一部犠牲にすれば、無力化できる。旅の間に一時的な出力予備は回復していた。奥にある量は回復していなかった。

彼はどちらにも手をつけなかった。

「裏口は？」

マリアムは首を振った。「予想している」

「屋根は？」

「それもよ」

ナディラは群衆を抜けていく貯水槽用の荷車を指した。「でも、あなたが何かを買うとは思わないでしょう」

彼女は十代の運搬人を止め、重い濾過膜を二枚と配達請求権を買った。ほどなく二人は、正規の交換通路を通り、協同組合の配送所へ向けてその枠を運んでいた。膜はかさばり、不快なほど湿っていて、露出した顔を狙う識別スキャナーにはほぼ完全な遮蔽物となった。この取引は地元の水台帳に存在していた。正規の商取引を行政の検査機が止めるには、別の管轄からの許可が要る。

ヒューマノイドがロイの腕に触れるほど近くを通った。筋肉は、彼が抑えるより先に致命的な解決策を列挙した。機械はカートリッジと支払封印と運搬人の市職員制服を見た。ロイの顔を見上げなかった。

逃走に勝利の感覚はなかった。避けられた費用があっただけだ。

＊　＊　＊

川村が結果を受け取ったとき、報告書は商業交通と管轄の制限に妨げられた、結論の出ない衛生検査について述べていた。現地の自律システムは次回検査で生体認証へのアクセス権を広げることを推奨した。彼はその提案を消した。

「対象は現地にいました」と補佐官。

「ああ」

「管轄権の引き渡しを強制できます」

「なぜ彼が必要なのかを、全員に教えることになる」

「すでに回収戦力を展開しています」

「戦力は否認できる。好奇心は否認できない」

彼は別のフォルダーを開いた。二つの歴史的な治具は、企業解散時の財産一覧に記録されていた。所有権は国家へ移らなかった。省の情報開示請求権を認めない複数の管轄を経て管理される一族の信託に留まっていた。唯一の受益者は、川村が長年口にしていない姓を持っていた。

事務システムが索引を付ける前に、彼はファイルを閉じた。

省が望むのは、タイレルの知識を持ち去り、その成果を返さなかった女性だった。プドゥの対象は彼女へ導くかもしれない。だが新しい問題も生じた。政府のものでも研究者のものでもない、旧式の起動システムがあったのだ。

世界は条約で統一できるかもしれない。古い機械は、誰が自分を起動してよいかに頑固なほど厳密だった。

＊　＊　＊

夜はプドゥ・アルファの姿を変えたが、理解しやすくはしなかった。商いは屋内へ移り、道は私的に統治された内部空間を結ぶ経路となった。市場の向こうのミナレットから録音された時刻案内が流れ、続いて普段どおりの会話のざわめきが聞こえた。雨水はセンサーの並ぶ側溝に落ち、その一リットルごとが、徴収権を所有する誰かのために数えられていた。

ロイは三つの世紀の素材で補修された屋根の下に立っていた。製造者の名前、廃止された記録媒体の系列、そして自分という存在を許可する手段を、かつて誰かが持っていたという知識。それらのどれも、あと何年生きるのかを教えなかった。第十一の身体を組み立てた者が誰かもわからなかった。

答えは近づくどころか遠のいた。それでも距離には、方向が与えられれば意味がある。

ナディラが熱い茶を二杯持って現れた。ロイは一杯を受け取り、湿った空気へ湯気が逃げるのを見つめた。

「まだ終わっていないわ」と彼女。

「ああ」

「今なら、まだ立ち去れる」

「この地区からは出られる」

「そういう意味じゃない」

そのとき彼は理解した。探究を捨て、不確かな寿命を受け入れ、これ以上の危険を連ねないという選択肢を、彼女は差し出している。最初の死の前には持てなかった選択だった。今はある。なぜ誰かがそれを与えたのか、説明できないとしても。

「俺がやめても」と彼は言った。「俺の次の命がいつ終わるか、誰かが知っている」

ナディラは答えなかった。

街の向こうの塔の広告は、共有仮想退職空間での継続する存在を売り込んでいた。模擬の顔は若かった。光の下では、本物の保守員が防護マスクをつけ、詰まった集水器の水を捨てるため屋根を横切っている。

広告がどちらの集団を生きているとみなしているのか、彼には判断できなかった。

その後、ナディラが旅の次の段階を手配している間、ロイは改造されたメモリーカードの小さな画像を最後にもう一度見た。黒い長方形の外装。学び、治癒し、交渉し、追跡する機械の間で、その品はばかげた遺物だった。自分の隠された中心は複雑で巨大で、新しいものだと思っていた。ところがそれは、机の引き出しで行方不明にもなりそうな小物に依存しているかもしれない。

七角形の印は視界の端に残った。未解決の連想が勝手に完成しようとする。彼は拒んだ。目覚めて以来初めて、自分の機械が説明を作り出せるというだけで、それを受け入れる必要はないと理解した。

どこかでは、すでに一台の機械が彼の経路を知っている。どこかでは、思い出せない女性が彼を動かす手段を保管している。どこかでは、死んだ男の息子が、彼のような身体を最初から復旧させる装置を所有している。

ロイは端末をナディラに返した。

雨は降り続いていた。

彼はもう、その雨をロサンゼルスの雨と取り違えなかった。